『真宗文化』第17号平成19年度2008年3月発行（真宗文化研究所）

第三三回　光華講座

自力から他力へ

――私の歩んだ仏の道――

浅田正博

はじめに

ようこそお越し頂きました。また私のようなものを伝統ある光華講座にお招き頂きましてありがとうございます。

今、所長の荒牧先生から身に余るご紹介を頂きました。本当はもっと学問的なお話をさせて頂かねばならないのかもしれませんが、今日は私自身の身近な話を気楽に聞いて頂きたいと思いまして、資料も用意させて頂いておりません。ご了承ください。

『真宗文化』第17号平成19年度2008年3月発行（真宗文化研究所）

無　常

――友人の死

さて、私が本当に「この世の中は無常だなぁ」ということを感じた出来事がいくつかございました。その一つに、今から十九年ほど前の事があります。わたしの高校時代の友達が三人おりまして、一年に一度は必ず四人で会っていろいろな話をしていたのです。平成元年のことでした。私が龍谷大学の内地留学制度によって東京大学のインド哲学の研究室へ一年間お世話になったことがあります。そのとき、せっかく浅田が東京にいるのだからということで、友達三人が大阪から東京へ出てきてくれたのです。皆が四十歳過ぎの年齢ですから、毎日忙しいんですね。なかなか東京まで出てくる機会がなかったのですが、やっと三人が時間を合わせて、飛行機で羽田へ着いたのです。それで私が迎えに行きまして、そのまま銀座へ出ました。銀座で夕食をとりました。それはもう宴会になりまして、久しぶりにお酒を飲んでワイワイと話をして、学生時代の思い出とか、現在の状況をみんなが語り合いました。

その中の一人に、出野信君（まこと）という友人がおりました。彼は本当に私にいろいろな影響を与えてくれた無二の親友です。その出野君が非常に体格がいい人で健康優良児でした。高校時代は相撲部に所属しており、大学を出てからは自衛隊の幹部候補生になったほどです。酒を飲んで、みん

なだんだんテンションが上がってきますと、酒に酔った勢いも手伝ってですが、「僕は、みんなに決して負けない自慢できることが一つあるんだ」と大きい声で言い出したのです。「何事かね」と言うと「生まれてからこのかた、お医者さんにかかったことがない」と言うのです。お母さんが看護婦さんということもあったのでしょう。風邪をひいても医者に診てもらわずに薬で治ったというのです。だから、「お医者さんにかかったことがないのが自分にとっての一番の取り柄だ」と自慢気にいうのです。けれども、話をしていますと歯が見えますでしょう。その歯を見れば虫歯だらけなのですよ。それで私が「歯医者に行きなさい」と言うと「いや、歯なんて抜ければまた生えてくるから」と平気で云って少しも気にしないんですね。「そんなことないだろう」など言って、ワイワイ…時間を忘れていたのです。ハッと気がつきましたら、もう夜中の一時十五分でした。この調子だったら徹夜で話をするだろうから、もうそろそろホテルへ帰って休もうじゃないかと言うことになりました。

ご承知のように、ホテルは二人一室の部屋が多いですね。四人おりますので二室借りておりました。銀座のまん中にあるホテルです。それでホテルへ入って休んだのが一時半頃でした。「まぁ、目が開いた方がお互いの部屋を起こし合おうじゃないか」と言って、朝起きる時間を約束せずに休んだのです。そういう時は小学生の心がまだ残ってるんでしょうか、案外と朝早く目が開くのですよね。わたしは六時頃に目が開きまして、同室の者とベッドに横になりながら話をしていたのです。ところがいっこうに隣の部屋から起こしに来ないのですね。九時になりました。「これはもう、こちらの方から起こしに行こう」ということになり、背広を着て、ネクタイを締

めて隣の部屋をノックしたのです。すると、寝間着を着た一人が目を真っ赤に腫らして出てきました。「どうしたんだ」と言うと「僕は二日酔いで、昨夜部屋に入ってすぐ横になって今まで知らずに寝ていた」と言うのです。そこでもう一人、「出野君どうした？」と聞いたのです。そうすると「いないよ」と言うのです。「たぶん朝早く起きて散歩にでも行ったのじゃないかな」と言うものですから、「それじゃ帰るまで待っていようか」といって部屋に入ると、靴が脱いであるのです。「靴を履かずに散歩に行くことはないだろう」と誰かが言います。ベッドをよく見ますと寝た形跡もないのです。そうすると突然に一人が「部屋を探せ」と言うのですね。部屋を探せと言いましても、ホテルの一室ですから探す部屋はバスとトイレがユニットになった所しかありません。僕はそこへ飛んで行って、ドンドンと叩いて「出野いるか！」と呼んだのですが返事がないのです。ドアのノブに手をかけると、中から鍵がかかっています。そうするともう一人の友達がすでにフロントに電話をかけてくれて、すぐに鍵を持って来て下さいと言っています。ところが七階だったものですから、なかなか鍵が届かないのです。イライラして私は廊下に出ますと、もう掃除のおばさんが来ておられたので「この鍵開きませんか」と尋ねると、「あぁ、簡単に開きますよ」といって、持っておられたハサミで鍵穴をこじ開けてくれたのです。そうしますと、中からボタンを押す鍵なのでしょうかパチンッと音がして開いたのです。中へ飛び込みますと、なんと、その湯船の中で彼が倒れていたのです。もう、ホントにビックリしましたね。シャワーが出たままになっていました。

すぐ救急車を要請しました。さすがに東京のまん中ですから、こちらが驚くほど早く来てくれ

ました。真っ白の服を着た隊員が担架を持って走って来てくれたのです。当然ながら、すぐに病院に運んでくれるだろうと思っていたのですが、私達を部屋の隅に集めて「そこで待っていて下さい」と言ったまま、担架に乗せて運び出そうとしないのです。それで私が近くへ寄っていって、「とにかく早く運んでくれませんか」と言ったのです。そうすると隊員の一人が「ちょっと中へ入ってください」と私をバスルームの中へ誘い入れて、出野君の横たわっている手を上にあげるのです。そうするとあがったままで、その腕が落ちないのです。もうすでに硬直しているのだと説明してくれました。次に足を上げてふくらはぎのところを見せてくれますと、ポツポツと死斑が出だしているのです。隊員の方は「一時間二時間前に亡くなったという状況ではありません。かなり時間が経っていますね」と言うのです。そして「このように死んでいることがハッキリとした場合は、救急車に乗せるわけにはいきません。」「この状況では、もう、私たちの手は離れました。すぐに警察に電話して下さい」と言われたのです。何が起こったのか全く私には理解できない状況でした。しかし云われるままに警察へ電話しますと、今度は十人ほどの私服刑事がドカドカっと入ってきまして、「一人が死んでいるんだ、お前ら動くな！」と、本当に犯人扱いされるのです。また部屋の隅へ三人を集めたままで、刑事さんたちが部屋を隈なく調べだしました。当然何も出てきませんよね。

そうすると一人の刑事が「これ何だ！」と叫ぶのです。何が出てきたのかと思ってビックリしましたら、寝間着を着て目を腫らしている友達の背広を見つけたのです。椅子に掛けてあったその背広に弁護士のバッジが付いていたのですが、そのバッジを刑事さんが見付けて「これ何

だ！」と叫んでいるのです。そうすると二日酔いの友達が「僕、弁護士です…」と半分まだ寝惚けた感じで答えますと、刑事さんの態度がコロッと変わりまして、「あ、先生ですか？」・・・・。今まで犯人扱いをしていて、今度は「先生ですか？」っていうのですから、まぁすごい変わり様だなと思いました。こちらはかなり気が動転している中で、刑事さんのあまりの反応の大きさに驚いたほどですから、さぞ大きな変化があったのだろうと思います。

それはさておきまして「遺体は警察のほうで署の霊安室へ運びます」「みなさんからは調書を取らねばなりませんので警察署へ来て下さい」といって、彼とは完全に隔絶されました。本人は外傷もなく死んでいるのですから、解剖をしなくてはいけないということになりました。

銀座は築地警察管内です。そこで築地警察署へ行きますと「家族に連絡を…」と言われました。彼は母一人子一人なのです。まだ結婚をしていませんでした。妹さんも先立ち、お父さんも数年前に亡くなられて、高齢のお母さんと二人家族でした。連絡するのは辛かったのですが仕方ありません、電話をしました。そうするとお母さんは事情を聞いて「えっ」と絶句されたままでした。言葉になりませんでした。お母さんにも「まさか」という思いで一杯だったのでしょう。「とにかく東京へ来て下さい」と申し上げるのが僕たちとしても精一杯のことでした。

親戚の方に連れられて東京駅に着かれたのが四時過ぎでした。私たちが迎えに行き、築地警察署の霊安室へお母さんを案内しました。そうすると彼はすでに棺桶に入っていました。ただ、その日は日曜日だったものですからすぐに解剖が出来ないのです。月曜日にならないとダメだということでした。それはどういうことかと云いますと、解剖するまではたとえ母親であっても、遺

体には触らせてくれないのです。棺には顔のところにガラスが入っていますので、お母さんが遺体にさわらずにそのガラスを撫でて出野君に声をかけられたのです。「まことよ…、まことよ…」と泣かれました。私はその姿を見て初めて、「あぁ、出野君死んだのだな」と思いました。彼が死んでいるは午前九時過ぎに分かったのですから、七時間半ほど経っています。この七時間半ほどの間、私は死体を目の前にしているにもかかわらず彼が死んだということが自分では納得していなかったのです。そして七時間半たって初めてお母さんのその姿を見て「あぁ、彼は死んだのだなぁ」と合点がいったのでしょう。そうすると今度は涙が出て涙が出て止まりませんでした。それまでは少しも涙は出ないでしたし、少しも寂しいという気持ちも湧かなかったのですが、そのお母さんの姿を見てからは一転して寂しくって寂しくってたまりませんでした。それまでは何が起こったのかすらわからない状態だったのでしょう。「彼の死」を納得出来なかったのでしょう。否、むしろ「彼の死」という現実を自分に受け入れるのを私自身が拒否していたのかも知れません。

解剖の結果、一般にいう突然死でした。「虚血性心不全」という死亡診断書をいただいたのです。そこでやっとのことで大阪へ連れて帰り、大阪の自宅でお葬式を出しました。

その後、私はまた東京へ帰り、ホテルへお礼に行きました。「とにかく無事にお葬式が終わりました。大変お世話になりました」と菓子包み一つを持って行ったです。支配人が出てきてくれました。「ありがとうございました」それだけしか言えません。それ以上話をする内容もありません。しかしわざわざ支配人さんが出てきて下さって、しかも応接室にまで通されているのです

から、何かを言わないといけないと正直焦りました。そこで私の口をついて出た言葉が「ところで、出野君が亡くなったその夜、ホテルは如何でしたか」。だったのです。そうすると支配人は「はい、ここは非常に立地条件がいいものですから、お陰様でその晩も部屋は満室でした」と答えたのです。私はその言葉を聞いて背筋がゾーッとしました。「満室でした」ということは、朝、出野君が亡くなったその部屋も使用しているということになります。もちろん消毒はしていると思いますが、出野君が亡くなったそのお風呂場で、何も知らない旅の人が同じ湯に入って「あぁ、今日は疲れたなぁ。いい湯だなぁ」と云っていたのかも知れません。それを想像して私は背筋がゾーッとしたのです。それと同時に私が死ぬ時、やはり出野君と同じようにして死ぬんだなぁと思いますと今度は自分の死が恐ろしくて恐ろしくてたまらなくなりました。

私たちは地方へ出ていく機会が多いのです。出張しますと、ほとんどの場合ビジネスホテルのシングルルームで泊まります。このことがあってから一ヶ月というものは、私はホテルのシングルルームに入って、バスルームを覗くことすら出来ませんでした。覗けばそこに出野君がいるんじゃないか、否、死んでいるんじゃないか、と想像してしまうのです。それを考えますとのぞくことすら出来ません。

それだけじゃないんです。たとえばベッドの上に横になって休んでいるときなど、このベッドで誰か死んだ人がいるんじゃないかななどと想像しますと、夜中でも飛び上がって眠ることが出来ません。人間というのは想像が想像を生みますね。

みなさんも、たぶん経験がおありだと思いますが、自分の死というものを考えた時、明るい世

界じゃないですね。どうしてか知りませんが、真っ暗闇の世界を思い起こしてしまいます。しかも、地獄へ落ちていくような感じがして、頭を下にしながら奥へずーっと吸い込まれるような印象が私にはありました。死を考えれば恐ろしくて恐ろしくてたまりません。

ところが今から思いますと、そのような恐怖感の中にあったのですが、日常のことはきちっとやっているのです。大学へ行って授業もしているのです。きちっと日常生活はしているのですが、どのようにその期間過ごしたのか全く記憶にありません。バスに乗っている最中でも「自分の死」のことばっかりを考えていたようです。一ヶ月ほどでしたが、あのまま悩み続ければ自殺でもしていたのじゃないかと思うほどに悩みました。一ヶ月経った時のことです。自分の他にもう一人の自分がいるように思えたのですね。そのもう一人の自分が、私に語りかけるのです。これは夢の中なのか今考えるとよくわからないですが、「お前は何のために仏教を学んでいるんだ」というような呼びかけが、自分自身にあったように思えたのです。「お前は何のために仏教を学んでいるんだ」。その言葉を自分で聞いてハッとしました。「あぁ、そうだ。阿弥陀さんがいてくださったんだなぁ…そうだったんだ」・・・それでやっと気持ちが落ち着いたのです。

自分の心の中の「死」の問題と、大学で学んでいる仏教とが別々だったのです。一つにならなかったのです。普段、偉そうなことを言って私は学生に講義をしているのです。たとえば「諸行無常というのはなぁ…」などと、いろんなことを言っていますが、本当に諸行無常を知らずに話していたように思います。ですからそれ以来、私は「諸行無常というのは、日常生活の中で、〝まさか〟と思うことが平然と起こることだ」といって講義をするようにしています。そして

『真宗文化』第17号平成19年度2008年3月発行（真宗文化研究所）

「自分の人生に〝まさか〟が起こったとしても、決して動転しないことが仏教を学ぶ意味だ」と語っています。しかし今から考えますと、無常というものを本当に目の前で教えてくれたのが出野信君という親友だったと感謝をしています。

このような事件が、私の四十三歳の頃にあったのです。もちろんそれまで私は仏教を単に知識として学んでいたつもりはありませんでした。自分としてはそうでないと思っていたのですが、結果的には、単に頭の中だけのことだったのだと思い知らされたのです。

私の半生

私が、決して知識だけを求めて仏教を学び出したのではないことをご理解いただくために、まず私の生い立ちから話させて頂きたいとおもいます。

私は在家の出身なのです。開業医の二男として生まれました。兄と妹がおります。三人兄弟のまん中は損な役回りです。兄は後を継ぎ、妹は女の子でかわいいというわけで、まん中は分家でもさせねばならないと父親は考えたというのです。母親の姉が、浄土真宗の西本願寺の末寺に嫁いでいました。そこに子供がいなかったものですから、二男の私に白羽の矢が立ったようです。「養子に欲しい」と言われたといいます。そこで五歳の時にそのお寺へ養子に入りました。ところがその養父母は、お寺で生活しながらお念仏を喜ぶというような人ではありませんでした。ですから小学校、中学校一、二年くらいまで仏教について、あるいはお念仏の雰囲気の中で育てら

れたという意識はありませんでした。

ところが中学二年生の時に、私は左足の膝に水が溜まる関節炎を患いました。こういう時には実父が医者ですので助かります。実家へ帰って養生したのです。そうすると、その関節炎がだんだん悪化しまして、ロイマチス菌が関節を冒していったようなのですが、それが心臓にきまして、小児性のロイマチス性心内膜炎という心臓病になったのです。実際にどのような症状が出るかと言いますと、一般に言われる狭心症と同じ症状です。いわゆる狭心症の発作が起こるのですね。そのロイマチス菌がどこを冒したかといいますと、心臓に栄養を送る冠動脈の血管を冒したのです。ですから、その動脈が痙攣をするわけです。そうしますと心臓に栄養がいかないものですから、心臓の動きが鈍ります。急にしかも極端に鈍ります。そうしますと当然、手足に血が行かないものですから、氷水にでも両手・両足を入れたような状態になります。その上、心臓が苦しいですから、ベッドの上でのたうちまわります。いろいろな注射を打ってくれるのですが、いっこうに効きません。ところが三十分ほど苦しめばケロッと治るのです。これを一般に狭心症の発作と言うのですね。最初は一週間に一度くらい起こっていたのですが、それが二・三日に一度になり、ひどい時には一日に一度、もっとひどい時には一日に三度、定期的に起こるのです。これには本当にまいりました。発作が起これば苦しくて苦しくてたまりません、他の人が何を言っているかすらも全くわかりません。みんなが手足を熱いタオルで温めてくれるのですが効きません。一日に三度そういう発作が起こった時に父親がベッドの上で苦しんでいる私の姿を見て、「三人子供を産んだけれども一人死なしてしまったなぁ」といったそうです。後ほどにそれを聞

いて、なんと無責任な父親であり、医者だなぁと思いましたが、それほどに手の施しようがなかったのですね。

父親は軍医でした。軍隊の時にたまたま使っていた劇薬の亜硝酸アミルという小さなカプセルを数本持ち帰っていたらしいのです。それを心臓が痛い、苦しいという私の声を聞いて、イチかバチか試してみようということで、私の鼻元でポンと割っのです。大変キツイ匂いがするのですが、その匂いを嗅ぎなさいと言われて嗅いだのですね。そうすると強烈な匂いのお陰で血管がパッと開いて心臓が一瞬にして動くのが分かったほどです。全身が瞬間に熱くなって苦しみが一度に吹っ飛んだのです。嘘のように見事に苦しみが消えたのです。ところがこれは劇薬ですので、一日に一度しか使えないのです。一日に二度三度と起こる時は、同じように三十分ほどのたうちまわるのです。でもそういう薬のお陰で病因もわかりどうにか一命を食いとめたという状況でした。

このような次第ですから私は、中学校は四年間かかって卒業しました。高校は五年もかかって卒業したのです。やっと大学一回生に入った時には、私の同級生はすでに四回生でした。大学生の三年間の差はとても大きいですよね。しかし大学へ入る時、みんなが反対したのです。大学へ行ったってたぶんダメだろう、卒業できないのじゃないか。皆が反対する理由も分かります。中学校三年で卒業するところを四年かかり、高校も五年かかって卒業したのですから、大学の四年間はたぶん持たないだろうと、みんな思ったのでしょう。ところが大学へ入って一年間ほどは苦しい思いをして通いましたが、二回生あたりから非常に元気になってきたのです。そのころ私は

『真宗文化』第17号平成19年度2008年3月発行（真宗文化研究所）

「健康って本当にすごい、ありがたい」と思って自由に体が動くことを満喫しました。ずっと病室で育ったようなものですから、一つの部屋の中に籠もって遊ぶという麻雀などは嫌だったですが、外に出て遊ぶことを楽しみました。大学の授業も受けずに一年間ほど遊び回りました。これが健康なんだ、こんなありがたいことはない。それと同時に、私は、父親ですら私の命を見捨てたのに、それを自分で治したのだという、思い上がりの気持ちが非常に強くおこってきていたのです。一年ほど遊びに遊んだ末、ハッと気付きました。「お前、そんなことしていていいのか？」ということでした。自分自身もっと真剣に何かに打ち込まなければならないんじゃないか。他の人が経験していない、私だけが体験した病気を通しての意味をこれからの人生に生かさねばならないのではないか・・・・と。

出　会　い

――禅の修行

真宗のお寺で育てて頂いたんですが、真宗学を学ぶことにどうしても抵抗がありました。それは自分の思い上がった気持ちもあったのですが、それよりも何よりも阿弥陀さんって本当におられるんだろうか、極楽って本当にあるんだろうか、という疑問です。いるかいないかを本当に信じられない阿弥陀さんに全てをお任せするという、真宗のお念仏の教えにはどうしても納得がい

きませんでした。それよりも自分で何か行動を起こしたい。ようするに自力の世界へのあこがれのようなものが私にはありました。自分で修行するとか、自分の方から働きかけて仏になるというのですと、自分にはまだ納得できる所があるんですが、自分は何もせずに仏の救いを待つというのには、どうしも納得がいきませんでした。それで親鸞聖人が若いときに学ばれたという天台学を専攻するようにしたのです。そうしますと天台学を大学を学んでいるのですから、学問だけじゃなくって、天台宗の修行でもさせて頂けたらなぁ、という願いを持っておりました。

叡山学院という学校が比叡山の坂本側にあります。天台宗のお坊さんを養成する学校です。その学校へ講師に来ないかというお声がけをちょうどそのようなときに頂いたのです。そこで私は喜んで寄せて頂きました。小寺文頴先生という、私の学問上の兄弟子が学監としておいでした。そこで小寺先生にお願いしたのです。「親鸞聖人は比叡山で常行三昧という修行をなされたそうですが、私にもその常行三昧をさせてもらえませんか」と。そうすると小寺先生が何と言われたかというと、「常行三昧でも、と簡単なことを言うが、常行三昧という修行がどんなに厳しい修行であるかを君は知っとるんかね」と厳しく問い返されました。九十日の間、阿弥陀さんの周りを「南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏……」と唱えて、夜寝ずに歩き回るんだよ。簡単に言うけれど、九十日間君は寝ずにおれるかね。命がけだよ。といわれるのです。

今日、比叡山の西塔というところに常行三昧堂というお堂があります。一般には公開していませんが、特別にお願いして中へ入れて頂きますと、ご本尊の周りに大きな丸柱が何本も立ってるんです。しかも、その柱の間に青竹を渡してくくってあります。堂内へ入りますと、行者さんが

歩くという、廊下に相当する外陣があるのですが、そのまん中だけがピカピカに光っています。「あぁ、ここを歩いておられるのだなぁ」と一目でわかるのです。そこを昼夜関係なく寝ずに歩くのですから、大変なことです。どうしても眠たくなってくれば、その青竹をつたいながら歩くといいます。もうダメだという時にはその青竹を脇に渡して少し休むのだそうです。本当に寝いってしまいますと青竹から脇が外れますね。そうすると廊下に叩きつけられますので目が開きます。目が開けば、また「南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏……」と歩き回るのです。

「君にはそれだけの覚悟はあるか」と小寺先生は私に問いかけました。「それは先生、やってみないとわかりません」と言うと。「君は真宗のお坊さんだろう。この行は天台宗のお坊さんでなければ出来ないぞ。真宗を辞めて天台宗のお坊さんになる覚悟はあるか。」といわれるのです。その上「これは片手間にできる修行ではないぞ。学問をやりながらやろうなんて勝手なことを考えてもらえば困る。龍大を辞める。叡山学院も辞めて、山へ入って修行するというのだったら許してあげてもいい。しかも、それは死すらも覚悟した修行だぞ」といわれたのです。

それまで私は自力の修行をしたいという思いでいましたが「死を覚悟することが出来るか」と突然問いかけられると、思わず修行をするのにはそこまで覚悟しなければならないのかととまどってしまいました。本当に修行をするということはこんなにも大変なことなのかと改めて感心したほどでした。ところが、そのときの私を考えますと、真宗のお坊さんを辞めて、天台宗のお坊さんになる気はないし、しかも、大学を辞める気もない…と、そう思いますと、比叡山での修行は諦めざるを得ませんでした。

かといって、真宗の教えを真剣に聞こうという気がやはり起こりません。自力修行に思いはあります。そこで大学へ行きながら、真宗のお坊さんを続けながら、しかし修行ができるようなところはないだろうかと、自分に都合のよいことを合わせながら、いろいろと探しました。そうしますと禅宗の修行ですと私の願いが可能だということがわかったのです。

京都の北に竜安寺という有名なお寺がありますね。あの竜安寺の境内に入りますと、大殊院という塔頭があります。これは妙心寺の外塔頭になるのですが、そこに盛永宗興という老師がおられまして、在家の方を対象にして座禅を指導して下さっていたのです。座禅をさせて頂けるお寺があるということで、早速そこへ寄せて頂き「座禅をさせてほしいのですが」とお願いにいきました。その場合、座禅をさせていただくのにはどの程度の費用がいりますかということも私にとって大きな問題でしたので、おそるおそるお聞きしますと「あんたはまだ学生さんと同じ身分だそうだから、別に費用はいらないよ」といわれるんです。最初は自分の耳を疑いました。修行をさせてもらって、しかも朝ご飯も食べさせてもらって、別に費用はいりませんというのです。何か着るものはと聞きますと「お寺にある作務衣を着なさい」といってくれるのです。「真剣に修行をしたいのだったら費用はいらない。お金は稼げたときにもってくればいい」といってくれたのです。今でもそういうお寺があるんだなぁと、そのことだけでも私は感激しました。私の心に「よし、ここで一生懸命修行しよう」私が求めていた場所に出会ったという思いが湧いてきたのです。それからというものは毎朝四時半に起きて大珠院まで通わせて頂きました。

座禅ができるというのが非常に嬉しかったのです。それまでも見よう見まねで座禅をしたこと

がありましたが、実際に雲水さんに指導してもらって座禅をやってみると、それまでとは全然違って、これはまた大変でした。左ももの上に右足を乗せて、右ももの上に左足を乗せる。そして脊梁骨を立てるのです。要するに背筋をピンっと伸ばします。そして頭の芯を空へ突くようにするのですね。そうすると顎が自然にひけて顔が前の壁と平行になるのです。目は半眼といって、半分だけ開いて一メートル五十センチほど前に目を落とします。手は必ず右手を下に、左手を上にして組みます。だから右足は下、左足は上です。これで三十分動かずにずっと座禅を組みます。わずか三十分ですが、みなさんやってごらんなさい。最初は大変ですよ。十分も経ちますと足が痛くて痛くてたまらなくなります。痛みがなく悠々と座ることの出来るのは最初の十分くらいですね。その後といいますと足が痛くて痛くてたまらない。三十分どうにか我慢しますと、五分の休憩があります。そしてまた三十分間座るのです。その休憩五分の間に座を崩して前に立って足の痛みをほぐすのですね。そして次の三十分に備えるのですが、足が痛くて先ほどと同じ姿勢がとれないのです。そうすると足の組み方を逆にせざるを得ません。本当はダメなのですよ。何故右足が下かというと、「右」とは「動」を表します。「左」は「静」を表すのです。ですから「動」を「静」で抑えるということから「心を止める」ことを意味するそうです。ところが、お釈迦さんや阿弥陀さんの座っておられるお姿を見ると、右足が上になって逆の姿をとっておられます。左足の上に右足。左手の上に右手です。これは仏さんのほうから働きかけるということを意味しているのですね。要するに衆生救済に働きかけていく姿です。これに対して僕達はそうじゃないですよね。心をとどめて精神集中に入るのですから動いたらダメです。動を静でもって制

する意味から右は必ず下でなければなりません。でも座っていて痛くなればそのようなことを言っておれません。だから足を逆にします。そしてまた我慢して我慢して三十分座ります。そして第二回目の休息時にはまた前に立ちます。問題はその次に座る時です。右足も左足も痛くって腿の上に乗らないのです。そうすると半跏趺坐と言って、右足、あるいは左足だけの半分だけをもの上に乗せるのです。これは許されます。このように足を組み替えることによって三十分を四回まではどうにか足の痛みが耐えられます。要するに二時間は持つんです。ところが二時間を過ぎて座禅しようものなら、もうどうにもなりません。右足も左足も両方とも痛くって腿の上に乗らないのです。袴をはいて座禅を組んでいますから「他人には見えないだろう」と思って、安座にするのです。あぐらを組むことを安座と言いますが、その安座にしていますと雲水さんに見抜かれるのですね。巡警といって雲水さんが警策を持って回ってくるのです。そうしますと結跏趺坐や半跏趺坐をしていないのがバレてしまうのです。私の方をクルッと向かれます。禅堂や僧堂は黙堂（もく）といいます。要するに一切声が出せないお堂です。だからこちらを向かれても質問が出来ないのです。理由が聞けません。まして警策を降ろしてもらうと困りますよと拒否ができないのです。そこでは合掌せざるを得ません。合掌して頭を下げ警策をおろしてくださいという姿勢をとります。警策は樫の棒です、夏は三回、冬は四回づつ両肩に力一杯振り下ろされます。最初は当てられて気持ちがいいのです。ハッとして「あぁ、気持ちいいなぁ」と気付薬になります。一回目は気分が爽快です。ところが二回、三回、四回と重なってくると、今度は肩が痛くて痛くてたまらなくなります。

臘八大接心という集中して座禅を組む期間があります。十二月の一日未明から十二月の八日の、鶏鳴（けいめい）、鳥が鳴く時までです。この期間を一日と見ます。ご承知のようにお釈迦様が菩提樹の下で十二月の一日から八日までずっと座り続けられて、八日の明けの明星のキラキラと光るのを見て大悟徹底されたと伝えられています。それを模範にして、禅宗のお寺では毎年十二月の一日から八日までを臘八大接心と銘打って修行しています。この期間は雲水さん達はほとんど夜寝ずに座禅するらしいです。

私たちは在家座禅として行っているものですから、二時間ほどは寝させてくれました。それでも普段六時間も寝ている者が、二時間しか寝ずに毎日毎日座禅をするとなると眠いのは当然です。座禅中に寝てしまいます。そうすれば警策がすぐ降ろされるのです。肩が腫れ上がって痛くって痛くってどうしようのない時すらありました。どうして僕だけがこのように殴られなければならないのかと恨めしく思ったものです。警策は殴るんではなくて、降ろすと言うのですが、本当に殴られているように感じます。八日間の臘八を終わって背中を鏡で見ますと、赤く腫れ上がっています。あるいは単布団という、座布団よりも綿がたくさん入った布団をお尻に敷いて座るのですが、綿の布団の上に座っているという感覚がなくなります。三日もしますと、まさに鉄板の上にでも座っているような痛さを感じるのです。眠い、お尻が痛い、警策で殴られて肩が痛い…、もう散々な状況です。ところがまだあるのです。今お話させて頂いているのは姿の面だけですね。一番問題なのは心ですね。心を統一する、精神を集中するというのが座禅ですから心を見なければなりません。そのためにまず自分の息を数えなさいと教えてくれます。これを数息観（すそくかん）と

言います。吸うて吐いて一つと数えます。また吸うて吐いて二つを数えます。そして吸うて吐いて三つと、十まで数えればまた一へ帰ります。ですから無限に繰り返されるわけです。だから最初、座禅をさせて下さいとお願いすれば「君は数を十までよく数えることができるかね」と問われます。なにを馬鹿なことを聞くのかと侮っていましたが、一度皆さんやってみてください。一から十まで数え、また一へ帰って十までという風に二回でも繰り返すことができればたいしたものです。まさかと思われるでしょう?。ところがね、一度実際にやってみればわかります。特に夏の暑い時期などでは、蚊がブーンっと飛んでくるでしょう。蚊はよく知ってますね。頭剃って座禅をやってるわけですから頭に止まりやすいのです。蚊は止まればすぐに刺すもんだと思ってましたが違うのですね。蚊が止まれば、まず針で「どこを刺そうかなぁ」と探しているのです。それが感触として分かるのですね。そうすれば柔らかいところが見つかったとすれば、そこをチクッと刺すのです。それがわかるのです。「あぁ、探してるなぁ」とか、チクッと刺しでもすれば「こんちくしょう!」って思うでしょう。そうすれば数なんて忘れていますよ。

あるいは朝方に座禅をしている時でも、少し明るくなってきますと小鳥が鳴きますね。その鳴き声が大変大きな声で響くのです。あのように大きな音で鳴いているのだろうかとすら思いますね、普段は気付きません。そうすると、すぐ私の心が小鳥のほうへ行ってしまいます。あるいは朝の座禅で、それが終われば朝ご飯（粥座）を頂きます。典座という台所から朝のご飯のおかずのいい匂いがしてくるのですね。「今朝はおかず何だろうな」とすぐに考えます。このように心はコロコロ動くから心（こころ）だというような言い方をしますが、本当にそうですね。コロコ

ロと動きます。ですから「一二三四五六七八…」と足早に十まで数えるのですと数えるのが可能なのですが、吸うて吐いて一つ、吸うて吐いて二つ…とゆっくり数えていますと、十まで数えてまた一へ帰って、そして十まで行って…という風に、二回も繰り返すことすらできないのです。このように精神集中は大変なことだなぁと思いました。

ところが、ある程度座禅に慣れて進んできますと、いつもいつも数息観をしていることはなくなり、公案を与えて戴く段階に入ります。これは老師という座禅を指導して頂く師匠の部屋に行きまして、老師から直接に問題を頂くのです。老師の部屋は昼でも蔀戸を降ろして真っ暗にしています。ご本尊に蝋燭が一本ついているだけです。その隅に老師が座っておられるのですね。そこへ合掌して入っていきまして、ご本尊には一切合掌礼拝せずに、座っておられる老師に合掌礼拝するのです。ですから老師が悟られた人なのです。頭を下げたままで「公案を頂きに参りました」といいます。そうしますと、老師は「両手を打てば音がでる　片手の音を見てきなさい」と云ってくださるのです。これが白隠禅師の「隻手音声（せきしゅおんじょう）」といいまして、初心者が頂く一番最初の公案です。両手を打てば音が出る、片手はどんな音？というわけです。片手の音、隻手の音。両手を打てば音が出るけれども、片手の音ではでない？。これを座禅をしながらこの公案を拈提（ねんてい）するのです。拈提するというのは、座禅中にそれを繰り返し繰り返し考えて、どうしてだろう、どうしてだろうという大疑団を起こすんですね。大きな疑いの固まりになりなさいというのです。疑うということが精神集中の最大の要因だからです。どうしてだろう、どうしてだろうと考えれば精神集中ができるのです。白隠禅師が考えられたと言うこの「隻手音声」の公案を毎日・毎日

拈提するわけです。それを一時間半の座禅の後に、考えた自分の思い（これを見解というのですが・・）を老師のところに報告に行くのです。そうすれば、最初は手を出してパチっと言ったりするのですね。すると老師が「バカモン！」といわれます。それで参禅は終わりです。私は老師の顔の前でやってみたことがありますが、一切問題にされませんでした。いろんなことをするのですがいっこうに老師は「よし」といわれません。

人間というのは弱いものですね。自分で修行をしたいという一心でやってきて、やっと修行させてくれるということで、喜び勇んでいたはずなのです。ところが、ほとんど夜も寝ないものですから眠いし、尻が痛いし、肩が痛いし、公案で攻められてにっちもさっちもいかないしとなりますと、もういい加減、どうしてこんなところに来たんだろうという気持ちになって、本当に逃げ出したいという思いに陥ったことがあります。

同じように座禅をしている同僚でしたが、朝起きた時にいなくなっていたことがあります。隣の人ですよ。そのときに私も逃げ出したいとすら思いました。しかし自分はこの修行をするために来たんだと思いますと逃げ出せません。しかしその時、人間って弱いものだなぁと思ったものです。

今考えますと、やはり一番最初の臘八接心が一番苦しかったですね。でも、それが二年目、三年目、四年目となりますとその苦しさはなくなりました。私は結局七年間勤めましたが、七年も過ごしますとある程度、座禅の形になるのですね。様になるとでも云いましょうか。座禅を組んでいても足が痛くないのです。もちろん少しは痛みますが最初のような痛みはないのです。言う

ならば悠々と座禅ができるのです。、ところが七年たっても老師からいただく公案はなかなか通りません。通りませんけれども、次から次にいろんな公案を頂きました。

ちょうど臘八大接心の中日、四日目だったと思います。お昼のことです。座禅をやっておりますと、もう形は様にはなっておりますので、警策を降ろされることもあまりありません。毎年のことですから、様子は大体わかっています。お尻が痛い、これはもう仕方がありません。肩が痛いこともありませんでした。眠いのは最初の一日目か二日目くらいで、三日目ぐらいからは眠くもありません。そういうようにして四日目の昼の座禅を組んでいたときのことです。先程も言いましたように目を落とすところは一メートル五十センチほど前の敷瓦なのです。その敷瓦のところを見ようとせずに見ていたときのことです。その敷き瓦が映画のスクリーンのようになったのです。ずーっと絵像が映るのです。おもわず「あれ？」と思ったのですね。その画像を見るとはなしに見ていますと、自分の心の中の状況が姿となって現れているのです。それはすぐわかりました。僕は「起きながら夢を見ているのかなぁ？」と思いました。ところが目の前に警策を持って行き来する雲水さんの様子がわかっているのです。「寝ているんじゃない」「とすれば何だろう？」と思ってその絵像をずーっと見ますと自分の心の中の状況が如実に映るのです。それを見て私は思わず「何と自分の心は汚いものかなー」と感じたのです。今考えましてもその内容が明確に思い出されないのですが自分の心の状況に違いありません。そこで同時に浮かんできたのが親鸞聖人の『御和讃』でした。

悪性さらにやみがたし　心は蛇蝎（じゃかつ）のごとくなり

修善も雑毒なる故に　虚仮の行とぞなづけたる

「悪性さらにやみがたし」とは、私の心の中の悪の本性は更に留むことはなく、「心は蛇蠍のごとく」とは、私の心の中はヘビ、サソリのようなものと言う意味でしょう。「修善も」とは善を修するという意味です。座禅をするということも、一つの修善でしょう。「雑毒なる故に」とは、毒が混じるということで、煩悩の混じっているという意味です。「虚仮の行とぞなづけたる」とは仮の道、虚しい仮の修行という意味でしょう。そのような親鸞聖人の『御和讃』こそがその時の私の心の状況とピタッと合ったのですね。そういうことがあってから、私は座禅にいくことを辞めました。ちょうど七年間続けさせて頂いた座禅を止めたのです。ご指導頂いた盛永宗興という老師は、その後花園大学の学長になられました。ですから、すごい師匠に付くことができたと思いますが、その師匠に私が付いて行けなかったのですね。

――お念仏

自分の力で修行することが私にとっての大きな憧れだったのですが、その憧れが挫かれたような状況になったのです。本当にしばらくは悲嘆しました。自分は修行をやってもダメなんだなぁと思ったものです。そんなことがあってから、自分の周りを静かに見渡しますと、龍谷大学にはお念仏を喜ぶ先生方がたくさん居られることが分かったのです。やっとそれに気がついたとでも云いましょうか、それまで全く気付かない世界が見えてきました。自分は自力の世界にしか目がいっていなかったものですから、お念仏の、他力の世界を喜ぶ人の姿なんか全く見えなかったの

『真宗文化』第17号平成19年度2008年3月発行（真宗文化研究所）

です。今から考えれば愚かなことだったと思います。

先程、荒牧先生からご紹介頂きました私の恩師の佐藤哲英先生も天台の学問を生涯続けられた先生ですが、心の中では非常にお念仏を喜ばれた先生だったのです。その先生が亡くなられる直前のことでした。ちょうど一週間前のことです。先生は幼いときから大変病弱な方でしたが、どうしてかほとんど入院をされることはありませんでした。どんな病気をされてもほとんど自宅療養だったのです。その先生が三重県のご自坊の近くに入院をされたと聞いたものですから、これは大変だと思って、いま佛教大学の学長をされています先輩の福原隆善先生と二人で佐藤哲英先生の病室へお見舞いに寄せてもらったことがあります。そうすると、先生は病室のベッドで横になっておられて、天井を見ながら「南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏…」と唱えておられました。入院している部屋の中でですよ。私たちが行ったということがわかりますと、「あぁ、よう来てくれた」と申されてベッドの上に正座されたのです。私には顔色も良いようにさえ思えたほどでした。ところが先生は「実はあなた達に頼みがある」と申され、一つの原稿を見せながら「実は、私が死んだらなぁ…」とぽつりと語られるのです。「みんな香典くれるだろう？」と言われます。私たちは先生のお見舞いに行っているのです。それなのに、私が死ねばみんなが香典をくれるだろうっていうんですね。このような病人さんなんてまずいないのじゃないでしょうかね。私たちにとっては返答のしようもない会話です。しかも「香典をもらえば香典返しを考えなければならないわな」と言われるのです。病人さんが自分の死んだ後の香典返しまでを考えられるようなことがありますでしょうか。私は呆然として先生の言葉を聞いていたのです。そうしますと、

こともあろうに「私の香典返しだと思ってね、今、私の絶筆の書を書き上げたんだよ」と云われたのです。『若き日の親鸞聖人』と言うのだとも申されました。「この本を実は最後の第三校正まで終わって、出版ができる目途がついてから本当は死にたかったんだよ」といわれ、「ところがな、もういよいよダメだ。すまないけど、ここに初稿だけ終わったんだが、後二回の校正をあんたたちにやってもらって、そうしてこれをキチンと出版して、四十九日の満中陰に香典返しとしてみんなに渡してくれないか」といわれたのです。これには私は参りましたね。どのように返事していいかさえわかりません。もし「わかりました」と言えば「先生早くお亡くなりになって下さい」ということになりますしね。先生の依頼ですから「嫌です」というわけにもいきません。そこでやっと思いついたのが、「先生、もしものことがあれば私たちはどんなことでもさせていただきますので、そこまでご心配なされずにご養生下さい」というのが精一杯でした。ところが先生は実にニコニコと話をされるのです。ニコニコとそのようなことを言われれば、冗談で言っておられると思ってどうしてもその内容は信用できませんよね。先生は冗談半分で僕らをからかっておられるんだと、こう思ったものでした。そこで「もうご無礼します」と申し上げますと「これが最後ですよ。さようなら」と先生が言われたのです。そうしてまた横になられて、天井を向いて「南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏…」とお念仏を唱えておられました。

私たちは狐にでもつままれた思いで外へ出ますと、ご令息が廊下で待っていて下さいまして、「お二人に会って頂きたい方がいるのですが・・」と云われて主治医のところへ連れて行ってくれたのです。そうしますと、主治医の先生は机の前にレントゲン写真を何枚もかけて「実は佐藤

さんは膵臓癌だということが分かったのです。もうあまり生きることができないでしょう」と突然に云われたのです。私はおもわず「本当ですか」と聞き返しました。そして「後、何日くらいですか」と言いました。するとレントゲン写真を眺めながら「うーん、いくら長くても一週間かな」というのです。そこで私が「今お会いしてきましたが、ニコニコしておられ、とうていそのように思えませんが」と申しました。膵臓癌はすごく痛むようですね。「痛みも耐えておられるような様子がないですが」とも云ったのです。そうしますと主治医の先生も「そうなんですよ、私も不思議に思っているんです」と言われるのです。「しかしこの症状からすると、もう末期症状ですね。もういつ死んでも不思議じゃない病状です」と言われるのですね。それに先程の先生のお言葉にありました香典返しの話でしょう。私たちは本当に狐にでもつままれたような思いで車に乗って京都へ帰り着いたのを覚えています。先生もお医者さんも僕らをからかっておられるのだとしか思えませんでした。しかし、ちょうど一週間後の十月二十八日でした、ご子息から「先程、父が亡くなりました」とのお電話を頂いたのです。「あぁ、あれはやはり本当だったんだ」とその時、初めて本当だったんだと思わざるを得なかったのです。どうしてあのようにニコニコと自分が死んだ後のことまで指示して亡くなることが出来るんだろうか。私はどのように考えても最初は納得できませんでした。しかし、これがお念仏の世界なんだ、先生は本当の念仏者であられたからこうなのだ、と考えますと何か納得できる要素があるような気がしたのです。このような状況を生死を越えるお念仏者の姿なのかと感じたものです。

どうしても私が、先生の話を冗談としか受けとめることができなかったのには理由がありまし

た。実は、私の実の父がその数年前に亡くなっていたのです。あの私の主治医としての医者です。この実の父は変な自信家で、僕が小学校の頃、実家へ遊びに行きますと、三人の子供を前にして説教するんですね。「わしは医者だ。医者というのは科学者だ。科学者というのは宗教なんて信じない」決まってそのような説教なのです。すると横から母親が尋ねるのです。「それでは、死ねばどうなるのでしょうね」といいますと「死んだら、寝ているのと同じだ」このように云ってはばからなかった実父でした。ようく考えますとね、宗教を信じない父親が自分の子供を寺へ養子にやるのですから。まぁいい加減な父親やなぁと思ったものです。その父親が六十四歳で亡くなったのですが、亡くなる原因が肝臓癌だったのです。父が医学博士を頂いた時の研究論題が肝臓の研究だったのです。その父が肝臓を冒されたのです。父を診ていたのは兄で、今度は兄が父親の主治医であったのです。もう三十年ほども前のことです。昔は癌を宣告するかどうかは大変な問題でして、家族会議を開くという時代でした。兄が家族全員を招集して、父は肝臓癌だけれども、それを宣告するかしないかをその会議にかけたのです。僕は「宣告すればいい」と言いましたが、他のみんなは反対しました。

父は肝臓癌の病人をたくさん見て来たでしょうから、自分自身わかっていたと思うのですが、兄が「肝硬変」と言うだけで「癌」とは言わなかったのです。そうしますと「癌じゃないからな。そのうち治るんだ、治るんだ」と自分に言い聞かせるように話していました。ところが、病が進行してきますと、最初、黄疸が出て体全体が黄色になったのですが、日がたちますと黒くなってくるのです。全身が真っ黒になるんですね。しかも痩せてきます。ところが、お腹だけは腹

『真宗文化』第17号平成19年度2008年3月発行（真宗文化研究所）

水が溜まってポコンと膨れているのです。そのような自分の身体を見ただけでわかると思うのですが、それでも自分は「肝硬変」だといっていました。亡くなる一ヶ月前のことです。自分の身体を見て、「あぁ、弱ったなぁ」と初めて言いました。「自分の命はあと一年だろうか」といったのです。亡くなる前の日です。「一年だと思っていたけどなぁ。もう一ヶ月しか持たないかも知れないなぁ」と言って昏睡状態に陥りました。この父の姿を見て、自分の身体はわからんのだなぁと思ったものです。

また、仏教に全く関心を示さない人でしたから、もちろんお念仏一つ出ません。そして大きな涙を一つポツンと落として朝方に息を引き取ったのです。非常に僕は複雑な思いで父親を看送りました。自分の身近な人の初めての死ですから、死というものはこのようなものか、と思ったものです。

私はこの父親と同じような気持ちで佐藤先生のご往生に接していたのです。死というのは恐れるものだと思っていたのです。ところが佐藤先生は決して死を恐れられず、「自分が死ねば、香典返しをしなければ…」とニコニコと話されるその姿を心底信じることが出来なかったのです。今考えますと先生には申し訳ないことをしたと思います。先生は「死」でなくまさにお念仏者の「ご往生」の姿だったのだと今思うことが出来ます。

佐藤先生の少し後輩の先生に土橋秀高という戒律を専門に研究された先生が龍大におられました。私が大学院に進んだ時、佐藤先生は定年退職をなされていましたから、この土橋秀高先生に

指導教授としてご指導を頂いたのです。この先生は戒律の研究をするだけでなく、頭を坊主にされてましたから、その風貌から私はてっきり律宗の先生だと思っておりました。ところが心の中ではすごいお念仏者だったのです。それが長い間分かりませんでした。

私が大学院のマスターコースの二回生の時のことです。土橋先生が突然に「来年の三月いっぱいで大学を辞めたい」と言い出されたのです。理由を聞きますと、先生のご子息が京都大学の大学院におられて、そこを終わると同時に、来年の四月から東海大学の助教授に就任されるということが決まったといわれるのです。親子揃って大学の先生となると、どうしてもお寺が留守になるから、自分の学問は子供に譲り、自分は大学をひいて、お寺で門徒のみなさんと一緒にお念仏を喜ぶ生活をしたいと、こういうように言われたのです。あまりに突然のことでしたが、子供を思われる親御さんの気持ちが痛いほど分かりましたので、それ以上先生を大学にお留めすることができませんでした。

その先生が、大学をひかれて二年後のことです。奥さんが亡くなられたのです。少し患われて、二週間ほどで亡くなられました。お葬式に寄せて頂きますと、「まぁ、これも世の常かなぁ」と寂しそうに話されていました。奥さんが亡くなられて、お子さんが東京のほうへ赴任されておられますので、先生がお一人でお寺を護っておられたのです。お参りから、お寺の掃除から、洗濯、食事の準備など、全部先生が一人でされていたことになります。奥さんが亡くなられてちょうど一年ほど経ったある日のことです。私は京都新聞の朝刊を見てビックリしました。「山科の真光寺、本堂庫裏全焼」との見出しで写真まで入っての大きな記事でした。真光寺とは土橋先生

『真宗文化』第17号平成19年度2008年3月発行（真宗文化研究所）

のご自坊じゃないかと思って、朝食も食べずにお寺へ飛んで行きました。そうすると、焼け跡に先生が、頭に包帯を巻き、両手に包帯を巻いて茫然と立っておられたのです。「どうされたんですか」とお聞きすると、「夕べ、早くお参りが終わったから、夕方のお勤めをして、門も閉め、自分の勉強部屋へ閉じこもって勉強をしていた」と云われるのです。「今から考えるとな、夕方のお勤めのロウソクの火を消すのを忘れたようだ。それがどうも倒れたらしい」というのです。ですから、かなり燃え上がってから火事に気付かれたようなのです。しかも最初に気付いたのは、お寺の前を行き交う道ゆく人だったというのです。「火事だ」という声を聞いて火の中へ先生が飛び出て行き、燃えた木が落ちてきて額を怪我され、消火器で消そうとしてそれを掴んだ時には、消火器自体がすでに熱かったということで両手火傷をされたというのです。「ご本尊を始め、何も持ち出すことができなかった」と痛々しく話されたのです。

ところが、檀家さんが立派だったんですね。明くる日から、本堂再建委員会を結成されて、二年後には見事に本堂と庫裏が出来上がりました。久々に先生の笑顔が見られたのです。「先生、これで余生をゆったりと送られるといいですね」と僕が申し上げたら、「うんうん、うんうん」と言っておられました。

ところがそうではなかったのです。ご子息は結婚されていて、子供さんがお二人おられましたが、そのお二人の子供さんがまだ幼稚園に行くか行かないかの時に火事にあったのです。本堂再建となりますと、どうしても先生一人では無理です。手伝われる坊守さんがいりますね。そこで若奥さんが、東京にご主人を残して、子供二人と一緒に自坊へ帰ってきて先生のお手伝いをされ

ていたのです。要するにご子息は東京でお一人、単身赴任のようにして東海大学に勤めておられたことになります。一週間に一度くらいは電話連絡をなされていたようですが、その電話連絡がある時を境にして取れなくなったのです。大学へ電話をかけても出られないのです。そこで一週間ほど様子をみられたようですが、なお連絡が取れないものですから、先生が東京へ出ていかれたのです。そうすると、下宿の中から鍵がかかっていたといいます。ただならないと思われたのでしょう。壊して中に入ると、なんと電気ごたつに足を入れたまま、自らの命を絶っておられたというのです。本当に痛ましいというか、なんとも言えません。遺書は机の上に一枚だけあったと聞きますが、そこには「先に逝くのだから、葬式は出さないで欲しい」と書いてあったんだそうです。

しかし、そういうわけにはいきません。東京で火葬に付して本堂に遺骨だけが帰ってきました。お葬式を真っ新の本堂で行ったのです。私も参列させて頂きました。読経が済んだあと、法衣を着せた二人のお孫さんを横に立たせて、先生が会葬のみなさんに挨拶をされました。「この孫二人が立派に成人してこの寺を継いでくれるまで、私は老骨に鞭を打ってでも、このお寺を護り抜きます」と申されたのです。そうすると参列したみんなは泣いていました。そして異口同音に「先生ほどお気の毒な人はいない」と語っておられたのが印象的でした。

そして、また一年が経ちました。一周忌法要が勤まりました。その法要が終わった明くる日のことです。若坊守さんはまだお若いですよね。たぶん実家の方が許さなかったのではないでしょうか。若坊守さんは二人のお孫さんを連れて実家へ帰って行かれたのです。先生が、「この孫が

成人するまで…」とおっしゃったお孫さんも、先生の元から離れて行かれました。

私はもう居ても立ってもおられずに先生のご自坊を尋ねました。「先生、頑張って下さい」ということを伝えたい思いで行ったのです。夜八時頃でした。そうすると、応接室に通されまして、普段は口数の少ない先生ですが、その時は本当に色々なことを話して下さいました。しかし、その話の内容はすべて子供さんのことでした。

先生は晩年になられて歌や随筆などをまとめられた『雲わき雲光る』という本を出版されました。この中に、その時に話をしてくださった内容が綴られているんです。これを読ませて頂いて「あのとき先生は私にこのような話をして下さったな」というのがあります。そして「先生は、本当に寂しかったんだろうな」という内容の歌が何点かあります。

例えば、

◎春あさし　部屋のすみより　迫り来る　寂しさの中に　我が子の声あり

この歌を読んで、本当に寂しく思われたんだなぁと思いました。あるいは、夏になるとセミが鳴きますね。そのセミの鳴き声を聞いて、子供さんが話しておられた抑揚とセミの鳴く抑揚が一致するというような歌もあります。セミを和尚さんに見立てて、ミーンミーン、ジーンジーンと鳴くその鳴き声を、字のないお経をセミが唱えているという擬人法にして歌っておられるのです。

◎無字の経　いつまであげるセミ和尚　その抑揚に我が子をしのぶ

あるいは、秋になりますと、虫が鳴きますね。

◎虫の音は　結縁の糸　引きてやまぬ　あの音あの声　我呼ぶがごとし

そのような歌があります。

また、二人のお孫さんが先生の元を離れられた時の歌でしょうか

◎幼子二人　いつか故郷に　帰りきて　昔の面影　いずこにかもとめん

その歌と一緒に、

◎今からは孤独ぞ　我は秋空に　ポツリと浮かぶひとひらの雲

もあります。全く一人になったという思いを雲に託しておられるのですね。

先生から、このような話を聞かせて頂いていると、私がその前にいるのが苦しくて苦しくてたまらないようになりました。そこで先生の側から離れたい気持ちになって「先生、本堂へお参りさせてください」といって私一人で本堂へ上がって行ったのです。そうすると、ご本尊の阿弥陀様に一枚の色紙が供えてあったのです。私は突然に先生を訪ねたものですから、これは私に見せようとしていたのではありません。本当に阿弥陀さんにお供えしたものだと思います。そこには

◎両親（おや）送り　妻先に逝き　子の急ぐ　茜（あかね）の雲は　美しきかな

とありました。ご本尊の前に礼盤という導師が座る半畳ほどの畳を敷いた導師席がありますが、その畳の上に外陣に向けて供えてありました。

「両親送る」というのを私は知りません。ご両親が亡くなられてから私は先生にご指導頂いたものですから、それは知りませんが、奥さんが亡くなられた時は知っています。また、子供さんが自ら命を絶たれた時のことを「急ぐ」と表現されました。ここまでの上の句は現実の描写でし

ょう。問題は下の句ですね。「茜の雲は美しきかな」というここに先生のご心境が表現されているのだと思います。このようなすばらしい心境の下の句が詠めるでしょうか。私が先生と同じ境遇であれば、どうだろうかといろいろと考えてみました。不遜な言い方でしょうが、私だったら

◎両親送り　妻先に逝き　子の急ぐ　娑婆の世界に　我一人残して

これが、私の心境から出てくる精一杯の下の句ですね。どうしてみんなは私より早くに逝ってしまったのか、そのうらみつらみだけが詩に出てくるように思います。ところが先生は「茜の雲は美しきかな」と詠まれたのです。このような思いがどうして出てくるのだろうかと考えました。しかしいくら考えても当時の私には分かりませんでした。

先生が平成元年九月十日に御往生なされました。往生された後で、先生の遺品を整理していますと、もう一枚の色紙が出てきたのです。これは漢文で書いていますが、たぶん先生の思いを漢文で綴られたことと思います。

南無（南無とは）
悔恨不帰歳（悔恨すれども歳かえらず）
憂悩不測年（憂悩すれども年はからず）
悲喜倶慈恩（悲喜ともに慈恩なり）

最初の「どんなに悔やんだって、どんなに恨んだって、もう過ぎ去った歳は帰ってきません。」・・・これはたぶん、本堂が焼けた時の思いじゃないかなと思いますね。

次の「どんなに憂えたって、どんなに悩んだって、これから先の年は測り知れません。」・・・

これはたぶん、子供さんが亡くなられ、お孫さんが自分の元から離れて行った時の思いじゃないでしょうか。

南無阿弥陀仏

よく考えてみれば、「悲しいことも喜ばしいことも、全て阿弥陀さんのお慈悲の中の出来事だった」という意味が最後の一文でしょう。これが南無阿弥陀仏の「南無」という意味じゃないでしょうか。阿弥陀さんに全てをお任せするというのは、喜ばしいときだけを云うのではないですね。苦しいときも悲しいときも、すべてが阿弥陀さんのお慈悲の中ということだろうと思いますね。このように私は読ませて頂いたのです。

「悲喜ともに慈恩なり」という、この「悲」に大きな意味があるものと私は思います。私達は「ありがたい」と思うときは、嬉しいことや楽しいことがあった時に「あぁ、ありがたいな。嬉しいな。仏さんのお陰だな」と思います。ところが、苦しいことや、辛いこと、あるいは悲しいことがあった時には「仏さんのお陰だ」などとは思えませんね。しかし、それでは私たちの得手勝手なお慈悲の受け止め方だと思います。そうではなく「悲喜共に…」というところにすべてが「阿弥陀さんのみ心のままに」としてお任せしている姿があるように思います。

この「悲喜倶に慈恩」を基としてもう一度『雲わき雲光る』の書物を読めば、やっと先生のお心がわかりました。先生はこの書で「光雲無碍如虚空」という言葉を何度か書いておられるので

すが、私はそれを見落としておりました。親鸞聖人の『御和讃』ですね。「光雲の如くして、碍りなきこと虚空のごとし」というこの和讃です。光雲というのは、あかねの雲のことだったのです。

「あぁ、そうだ！。茜の雲って光雲だったんだ」それに気づいたときやっと先生の歌の意味が知れたのです。暗雲や黒雲という雲は太陽の光を遮りますね。ところが太陽が沈んだ後に、その暗雲、黒雲が沈んだ太陽の光に照らされて光雲になるのです、要するに茜の雲になりますね。ここを歌っておられるんだと思ったのです。

ご両親が亡くなられ、あるいは奥さんが亡くなられ、子供さんまでもが亡くなられたというのは、先生の人生にとっては大きな黒雲、暗雲の連続であったでしょうね。そういう黒雲、暗雲があったなればこそ、太陽の光に照らされて茜の雲になるのです。何とありがたいことじゃないですか。悲しいこともお慈悲の中ということはそのことだったのか、とやっと気づかせてもらったのです。人生での悲しみや苦しみは、まさに暗雲であり黒雲なんです。そのように理解させて頂きますと、人生における雲の大切さが分かってきます。人生には雲という苦しみが次から次に沸いてきます。そこで私たちはその雲から逃げようとしたり逃れようとします。それが間違いなのですね。この雲があるからこそ、要するに苦しみや、悲しみがあるからこそ、その雲が阿弥陀さんの光に照らし出されてお慈悲に触れることが出来るのです。その苦しみを無くそう無くそう、逃れよう逃れようとすれば、お慈悲はわからないのです。

このように考えてきますと先ほどの先生のご本『雲わき雲光る』という題名も非常に意味が深

いですね。人生には雲が次から次へと湧いてきます。しかしそれがあるからこそその雲が光るのです。先生は題名にまでお慈悲のありがたさを語ってくださっていたのですね。

佐藤哲英先生が亡くなられてから程なくして、土橋秀高先生が亡くなられました。その時とほとんど同時に、いや半年ほど遅れてから、最初に話させて頂いた、出野信君の突然死があったのです。そこで私には「阿弥陀さんに救われる」ということはこのようなことだったのか」と分からせてもらったのです。しかし、先ほども話しましたが、私がお慈悲に気付かせて貰うまでには彼の死から一ヶ月もかかりました。なんと自分は愚かな人間だなと、改めて思い知らされた感じです。しかしそれに気付かせて頂いたことは、自分にとって大変ありがたかったと出野君に感謝しています。

私は病気を自分自身で治したという思い上がりから、自力の世界を求め続けましたが、そのような自力では決して救われることはないということを思い知らされ、佐藤先生や土橋先生のお陰で、やっとお念仏に気付かせて頂いたのだなということをありがたく感じています。学問的なご恩と同時に、宗教的にも大変なご恩を私は頂きました。

このように、今日は、『私が歩んだ仏の道』という、つたない話をさせて頂きました。学問的な話ではなく申し訳ございませんでしたが、ご静聴頂きましてありがとうございます。